

矛盾こそ世界の真の姿

—— ヘーゲルとか弁証法って、みんな聞いたことがあると思うんですが、どういうものなのか、そして現代にどういう価値があるのかを教えてくださいませんか。

田坂 「弁証法」とは何かについて、実は、ヘーゲルは分かりやすく書いてはいないのです。彼の著作は、極めて難解ですから。そして、「弁証法」というのは、実は、ヘーゲルだけの専売特許ではないのです。

例えば、日本の思想においても、禅とか西田哲学とか、そこには弁証法的な世界観があります。西洋においても、弁証法とは、もともとソクラテスから始まっています。そして、現代においては、サルトルも『弁証法的理性批判』を書いています。このように、弁証法というのは、基本的に、哲学者や思想家が真剣にこの世界の在り方を洞察しようとするとき必ず掴んでいる智慧なのですね。そのことを申し上げた上で、その弁証法の本質は何かということ、あえて申し上げれば、それは「矛盾の哲学」と呼ぶべきものなのですね。

我々は、日常生活においては、一般に「矛盾」という言葉を「悪い意味」に使っています。

「君の話は矛盾している」とか、そのように使いますね。すなわち、我々は、「論理的に整理されたものが正しきもの、善なるもので、矛盾というのは誤ったもの、悪しきものだ」と、無意識に思っているのです。

しかし実は、全く逆で、「矛盾」こそが、この世界の本質なのです。ヘーゲルの弁証法も、世界の発展の原動力は「矛盾」であると、明確に述べています。ヘーゲルの思想を継承したマルクスもそうです。

たしかに、世界の本質は「矛盾」なのですね。最も分かりやすい身近な例を挙げると、例えば、なぜ我々は、このように一生懸命に生きようとするのか。それは、実は、「死」というものがそこにあるからです。すなわち、我々は、死にたくないと死を恐れる一方で、だからこそ、この我々の一度かぎりの「生」が輝くという面があるのですね。

もっと分かりやすく裏返して言えば、もし我々が、いま、無限の命を与えられたならば、おそらく、我々の人生のこの瞬間は、光り輝かないと思うのですね。例えば、今日、こうしてお会いして「ご縁ですね」とか、「お会いしたかった」という台詞も、あまり意味がない。無限の

命ならば、いつでも会えるのですから。人と人が巡り会う有り難さが、まったく感じられないわけでは。すなわち、死があるからこそ、生が輝く。

別の例えで言えば、人生において「困難」があるからこそ、達成したときに「喜び」が大きいのです。我々は、仕事でも「大変な仕事だ」と愚痴をこぼしますが、では、誰がやってもできるような簡単な仕事なら幸せかというと、それでは「働き甲斐」が感じられない。このように、我々の人生も世界の理も、すべて、「矛盾」こそが本質なのです。

むしろ、その世界に、人間が人知と人為で小さな世界を作ったわけです。「矛盾のない、論理的な世界」です。なぜなら、矛盾というものに処するには、人間として相当の成熟した力量が必要になってくるからです。誰もが、矛盾に処することができるわけではない。だから、大人になるということは、本当は、矛盾に処する力、矛盾を受容する力、さらには、矛盾を楽しむ力を身につけることなのです。それが、私にとっての「大人」の定義です。